

様式 1

研究報告書（平成 26 年度）

提出者 渡邊 拓也

提出年月日 2015 年 4 月 12 日

【本ユニットにおける研究テーマ】

和文

うつ病と後期近代

英文

Depression and late modernity

【研究のねらいと目的】 (600 字程度)

「後期近代」という時代は、現代の日本においてその第二段階へと移行しつつあるように見える。つまり、1970 年代以降の記号消費と高度情報化（文化・情報資本）の動きは勢いを失って後景に退き、代わりに感情労働と人々のつながり（社会関係資本）へと政治経済的な力点がシフトしつつあるように見える。例えば、一方では家族や地域コミュニティの親密な人間関係へのノスタルジックな回顧がなされたり、友愛と歓待のアジアン・ホスピタリティが、そのまま観光ビジネスの商品となったりする。だが他方では、人間関係構築やコミュニケーション能力の重要性があまりにも強調されることによって、過剰包摂（J. ヤング）と過度のノーマライゼーションが起こるとともに、新たな社会病理——孤独死、ひきこもり、現代型うつ病など——が生み出されている。

ときに、こうした新たな社会病理の出現は、福祉そのものに危機が訪れたことを示している。後期近代の福祉（自立支援）は、排除された存在に手を差し伸べはするものの、彼らを厳しい競争社会のヒエラルキーの底辺部へと組み込んでがんばれと背中を押し出すような、どこか残酷な役目しか果たせないものになっている。だからこそ今日、地域コミュニティ（地域活性化）への再要請が起こっているとも言えるだろう。うつ病などの病理を、単に医学的問題ととらえるのではなく、社会的な関係性の形成（中間圏）を視野に入れた、より広い文脈から再検討していくことが喫緊の課題なのである。

【研究業績】 学会報告・論文など

< 共著 >

・フランソワ・デュベ著、山下雅之監訳、濱西栄司・渡邊拓也訳『教えてデュベ先生、社会学はいったい何の役に立つのですか？』、新泉社、2014 年。

< 学会報告 >

・Takuya Watanabe, 'L'émergence de la catégorie de drogue, au point de vue historique', Séminaire inter-laboratoire d'anthropologie, "Prise et Emprise des Drogues. Les sociétés observées dans leurs substances", deuxième séance, le 11 avril 2014, Université d'Aix-Marseille, France.

【成果の概要】 (800 字程度)

前者は François Dubet, *A quoi sert vraiment un sociologue ?* (Paris, Armand Colin, 2011) の、フランス語からの全訳である。内容は高校生・学部学生むけの社会学の入門書となっているが、デュベの思想を随所を感じ取ることのできる好著である。全 267 頁中、渡邊担当分は 95 頁分 (163-251 頁、262-267 頁)。

後者は 2014 年 4 月 11 日にフランス (エクスアンプロヴァンス) で開かれた、「ドラッグと社会」をテーマにした学際的シンポジウム (エクス=マルセイユ大学主催) における、招待講演である (講演時間 45 分)。内容は、ドラッグ使用を逸脱視する社会的なまなざしの形成過程と近代化との関連についてである。

【通信欄】